



昔、携帯電話やインターネットが無かった頃の学生は、とにかくよく話をしました。中学生ともなるといっばしの弁論者で、できるだけ難しい本を読んでいるほうが格好が良くて、できるだけ難しい言葉で演説できる者がえらい、という風潮がありました。今70代ぐらいの団塊の世代の人びとの話です。それから学生運動に発展し、一部では過激な活動になったりして学生運動イコール暴力的、というレッテルが張られました。しかし、大多数の学生は普通の生活をして、勉強も恋も楽しんでいました。でも、この世代の方々に共通するのは議論好き、ということなのです。なんでも自分の論理に持ち込み、相手を論破することを楽しめます。そうです、何かの目的があって、そこに向かって話し合いをするのではなく、議論を楽しむために議論するのです！今では議論好きは変わった人としてしか見てもらえませんが、言葉を尽くして相手に物事を分かってもらおうとするその姿勢には、今言葉が氾濫するこの時代に生きる皆さんには、空気を読むよりも大切なことのように感じます。

読書の話

理科 井原茂

小さい頃の僕は本を読むのが好きだったのだろうか、よく覚えていない。小学校1年生のときから苦手な教科は国語だったし。ただ、親は「本を読む」ということを喜んでいたので親から与えられた本は読んでいた。そして、小学校高学年のときには、当時の男の子として標準的な「ジュール・ヴェルヌが好き」というレッテルを貼られてしまっていた。

僕が自分の意思で自分の小遣いで初めて本を買ったのは中学校1年生のときだった。近くの小さな本屋で買ったのは太宰治の『津軽』(講談社文庫140円)だった。その当時僕は何を思っていたのだろうかこの夏その文庫本を引っ張り出して読んでみた。『津軽』の内容は津軽半島を回ったとしか記憶に残っていなかった。改めてこの本を読んでみると、中学1年生の僕がこの本から何を感じたのだろうかと思ってしまう。その頃を振り返ってみると、中学校では仲間内で本(作家)の話はよくしていた。五木寛之や大江健三郎が面白いとか、エラリー・クイーンが面白いとか、横溝正史が面白いなどなど。その中で太宰治は特別だった。「好き」と「嫌い」にはっきり分かれた作家であり、討論?しやすい作家であった。僕はなんとなく「好き」のほうだった。まだ、多くは読んでいなかったが作品の持つ無頼派と呼ばれる雰囲気、玉川上



初めて自分で買った本『津軽』井原茂

水で入水自殺したことなど太宰治の持つ雰囲気グザイムムがかっこいいと思っていたのだろう。僕の周りを含め世の中に太宰好きは結構いたのではないだろうか。歌手の森田童子は絶対太宰好きだ。ファーストアルバムのタイトルが「グッド・バイ」その中の「まぶしい夏」は太宰の歌だから。僕は、森田童子を通して太宰の命日が「桜桃忌」だと知った。閑話休題。とにかく、いろいろな本を読むきっかけになったのは太宰治であった。

いろいろな本を読み始めた中学2年生(?)のとき、モーパッサンの『脂肪の塊』を読んで、太宰とは違う衝撃を受けたのを覚えている。読み終えた後のどーんと鈍く重く何かが心に乗りかかってきた感覚、身勝手な人間について、人間の本質について思いめぐらすきっかけになった本である。人について考えはじめた中学時代の僕は、思春期特有の、いつもイライラし、いつもなにかに腹を立て、自分のレーゾンデートルを探し求めていた。そのため中学校3年にかけて、三木清やトルストイ、ゲーテ、最後はショーペンハウアーまで読み、仲間内で討論もしたが(当然結論なんかでないが)何もすっきりすることはなかった。結局本を読んでも何もわからなかったが、本を読ん



でいるという事実が自分を落ち着かせたのだと思う。



高校時代は、あまり本は読んでいなかった。相変わらずの生活だった。大学に入ると、本を読む量が増えた。それは学生時代はお金がなく部屋にはテレビもなかった。アルバイトをしてお金をもらうより、お金がなくても自分の時間が欲しかった。その時間に本を読んだのだ。いろいろ読む中で宮本輝の『青が散る』に出会った。宮本輝は川3部作である『螢川』『道頓堀川』『泥の河』は読んでいたが『青が散る』はまだだった。この『青が散る』に登場する安斎克己の存在が、今までずーと僕の心に重くのしかかっていたもの取り除いてくれた気がした。同じだった。同じように感じていた。自分の存在が肯定されそれでいいんだと思った。安斎克己の存在に対する感じ方は人それぞれだろう。でも、それは『青が散る』を読まないと感じることができないことだ。

最近では年間40~50冊程度の単行本を読んでいる。読んでいる間は現実を離れ小説の世界にどっぷり浸かることができる。いろいろな世界が自分の部屋で体験できている。面白い。実に面白い。しかも、年に2~3冊は、読んだ後も2、3日は本の中の世界に浸れる本がある。実に気持ちがいい。少し現実世界に迷惑をかけるけど。

最近では年間40~50冊程度の単行本を読んでいる。読んでいる間は現実を離れ小説の世界にどっぷり浸かることができる。いろいろな世界が自分の部屋で体験できている。面白い。実に面白い。しかも、年に2~3冊は、読んだ後も2、3日は本の中の世界に浸れる本がある。実に気持ちがいい。少し現実世界に迷惑をかけるけど。